



再見 上町台地今昔タイムズ

災害と福祉に見る 「共」の知の継承と文化

弘本由香里 Hiromoto Yukari

歴史都市・大阪の背骨に当たる上町台地をフィールドに、2013年秋から2024年春にかけて、約10年にわたり20号を編集・発行した「上町台地今昔タイムズ」。過去との対話を通し、現在を見つめ直し、未来へつなぐ歴史実践として、改めて共有したい観点を取り上げてレビューする。

はじめに—過去と現在の終わりのない対話から—

「過去は現在の光に照らされて初めて知覚できる。現在とは過去の光に照らされて初めて十分理解できる。現在の光に照らされて初めて過去の光に照らされて初めて知覚できる。」歴史とは、現在と過去のあいだの終わりのない対話なのです。いずれも、イギリスの歴史家、E・H・カー（1892-1982）による名講義をもとにした著書『歴史とは何か』に記され

ている名言だ。原著が世に出た翌年の1962年には日本語版が出版されている。その後60年を経て、2022年に日本語訳新版が岩波書店から出版され、再びE・H・カーの名言を目にする機会が増えた。今、先が見通せない世界情勢や、異次元の技術革新や環境変動を背景に、長い射程で歴史を捉え、自らの立ち位置や行く先を考えようとする多くの読者層が、同書に関心を寄せている。過去と現在の間

の終わりのない対話は、一部の専門家だけが独占するものではない。混沌する時代にあつて、自らの暮らしと歴史の相互関係を、ポジティブな側面からもネガティブな側面からも不断に問い直す、広い視野や豊かな感受性が一人ひとりに求められている。近年、歴史教育や社会教育をはじめ、まちづくりや文化活動など幅広い話題の中で、しばしば登場する用語の一つに「歴史実践 (doing history)」

という言葉がある。その意味を、広義に積極的に捉えれば、専門性にかかわらず、さまざまな方法で過去との対話を行うことによって、よりよい暮らしや生き方を創造していくプロセスそのものである。筆者は、歴史都市・大阪の始まりの地であり、都心部を南北に貫く上町台地界隈をフィールドに、コミュニティ・デザインに関わる実践研究に取り組んでいるが、その一環で『上町台地今昔タイムズ』

「*1」というコミュニケーションツールの編集・発行してきた。ささやかな歴史実践の一つである。その意図を「わたしたちが暮らす『上町台地』。古代から今日まで絶えることなく、人々の営みが刻まれています。天災や政変や戦災も、著しい都市化も経験しました。(中略) 自然の恵みとリスクのどちらか一方、人との交わり方、次世代への伝え方……。過去と現在を行き来しながら、未来を考えるきっかけに(後略)」と、創刊以来紙面に掲げてきた。同紙のストックの中から、歴史実

践として改めて共有したい観点を、本連載でレビューする。先人たちの歴史実践—二つの文化誌が伝えた災禍—

上町台地は、古くは海の中に突き出した半島状の陸地で、地形的にも歴史的にも大阪の背骨というべき場所である。現在、上町台地の周囲に広がる平野は、かつては海だった淀川・大和川の河口部に生まれた、無数の洲がそもそもの大阪の姿である。水際に向かって拓かれていった大阪のまちは、数々の災害とともに歩んできた。その記録や記憶をいかに共有していくかは、大阪というまちに暮らしてきた人々にとって、どれほど切実で重い課題であったかは想像に難くない。

庶民がちまたの情報をいち早く共有できる瓦版が行き渡った幕末、そして新聞や雑誌が興隆した近代には、災害をめぐる濃密な記録が残されている。社会の激変期に、言論や文化をリードした先人たちは、驚くほどのエネルギーを注いで資料を収集し、記録

を編み、後世へのメッセージを発している。「上町台地今昔タイムズ」Vol.14(図1)では、災害史と文化を、「共」の知という観点から捉え直し、先人たちの実践に学ぶことを試みた。なかでも、今、改めて読み直したい2点を中心に紹介しておきたい。

大阪・船場の葉種商に勤めるかたわら、郷土資料を綿密に収集した南木芳太郎は、上方郷土研究会を創立するとともに、昭和戦前期の1931年に月刊誌「郷土研究」上方」を、私財を投じて創刊し、終戦間際の1944年まで、151号を編集・発行したことで知られる。大阪にゆかりの文学、美術、風俗、行事、演芸、信仰等々、第一線の研

究者たちによる優れた論文やエッセー等が多数収録され、大阪の浮世絵師・長谷川貞信らによる木版画の表紙絵は、大阪を中心に上方の折々の風物、記録に留めたい風景を描いて人気を集めた。その中に、ひととき異彩を放つ一冊がある。第46号(図2)と表紙絵は二代目貞信の子・小信の作で、大阪・上町台地のランドマークでもある「四天王寺五重塔倒壊の図」。

仁王門が倒壊し負傷した仁王像の背後に、完全に崩れ落ちた五重塔の瓦礫の山が描かれている。衝撃的な光景だ。「上方大風水害」とある。1934年9月21日に四国から近畿地方一帯を襲った室戸台風の記録的な被害に直面し、急遽10月号に予定していた内容を変更して編まれた緊急特集号だ。近畿各地の被害を伝える新聞記事や写真を採録しているが、驚くべきス

ピードで、要所を押さえ精確を期し、迫真の情報が集められている。あとがきで、緊急特集へのやむにやまれぬ思いが述べられている。「将来への備忘として残るような記録を作って置く必要がある」と考え、これを編んだという。表紙を開くと、各地の被害を伝える生々しい写真の後ろに、安政元年の大地震・大津波の碑と、慶応4年の淀川大洪水の惨状を描いた図も併せて掲載され



図1 『上町台地今昔タイムズ』Vol.14 (2020年春・夏号) 1面。左の二次元コードから、紙面の閲覧ができる。



図2 『上方』第46号(1934年10月号)。9月に猛威を振るった室戸台風による、大阪・近畿各地の被害を伝える「上方大風水害」として出版。表紙は、長谷川小信筆の木版画「四天王寺五重塔倒壊の図」を採用。右の口絵は惨状の写真。



図3 1923年の『女性』11月号では、9月1日に起きた関東大震災を受け、緊急特集を編んだ。平塚明子(らいてう)や与謝野晶子、高村光太郎ほか錚々たる面々の論説や提言が並び、谷崎潤一郎も作品を寄せた。

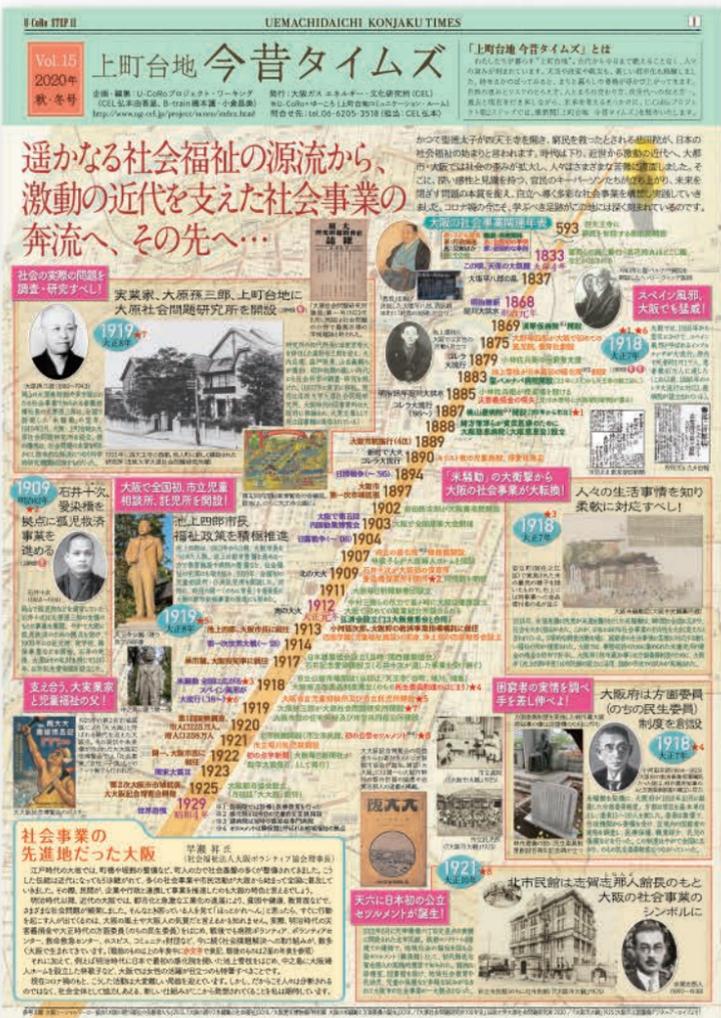


図4 『上町台地 今昔タイムズ』Vol.15 (2020年秋・冬号) 1面。左の二次元コードから、紙面の閲覧ができる。

ている。失われゆく文化の記録に心血を注いだ、南木による痛切な歴史実践であり「忘れるな、想い起こせ」との声が聞こえてくるようだ。

関東大震災の復興へ
大阪発『女性』誌の言論特集

『上方』の誕生に先立ち、大正時代に化粧品会社の中山太陽堂(現・クラブコスメチックス)がスポンサーとなって設立し、

大正モダニズムに大きな影響を及ぼした出版社があった。プラトン社といい、創始の地は大阪・上町台地。新時代の文化の担い手たる女性読者層をターゲットとした文芸誌『女性』を、1922年に創刊。翌年には『苦楽』を創刊。表紙画やタイトルロゴ、扉絵やカットに、気鋭のクリエイター、山六郎や山名文夫らを用いし、アール・デコ調の華麗なデザインで、一世を風靡したことも知られる。

小説や戯曲等と大衆を濃密につなぐ文芸誌の草分け的存在で、『女性』の編集長には劇作家・演出家の小山内薫を迎え、『苦楽』(第1期)の編集には小説家・劇作家の直木三十五や川口松太郎らが携わった。直木は、1923年9月1日の関東大震災を機に、プラトン社に職を得て大阪に

戻ってきたところだった。両誌の執筆陣には、大衆小説の先駆けとなった気鋭の書き手たちが名を連ねている。

関東大震災時、大阪は多くの被災者の職住や表現の受け皿ともなった。プラトン社は、関東大震災からの復興を視野に、言論のプラットフォームの役割も自覚し実行している。『女性』の11月号で緊急特集が編まれ、被災した関東在住

するところである」と記され、文化の担い手たる自負に目を見張るものがある。(図3)

近代の大阪に生まれた、特筆すべき二つの雑誌が大きな災禍に直面してどのような役割を果たしたかに注目したが、当然ながら災禍と歴史実践はそれだけではない。『上町台地 今昔タイムズ』Vol.14の1面では、古代以来記録に残っている主な災害を年表で列記するとともに、先述の2誌のトピックのほか、近世・近代に瓦版や写真が伝えた、津波や風水害の脅威、被災した寺社の再建、犠牲者を悼み教訓を刻む数々の慰霊碑の存在にスポットを当てている。また、同紙の2面では、現在に目を向け、被災文化を耕す地域に根ざした『共』の場づくりの実践取材を紹介している。

『共』の精神の系譜―災禍から社会福祉事業の先進地へ―

郷土研究誌『上方』大風水害号(1934年10月号)の表紙で、崩れ落ちた姿が描かれた四天王寺の五重塔は、多く

の人々の寄進で1940年に再建されたものの、1945年の空襲で焼失。戦後再び大規模な寄進によって1959年にコンクリート造で再建されている。創建以来、火災や地震や風水害や戦争による受難は絶えず、現在の塔は実に8代目に当たるといふ。

古代以来の歴史を持つ都市・大阪は、災禍の集積地でもある。自然災害だけではなく、人口が密集する都市では、感染症も猛威を振るう。人口が急増すれば、社会のひずみも膨らみ、困窮者をはじめ社会的弱者の問題も深刻化する。戦争の標的にもなりやすい。同時に、災禍を乗り越えるための『共』の精神や知が蓄積されてきた歴史もある。『上町台地 今昔タイムズ』Vol.15(図4)では、その源流をさかのぼるとともに、激動の近代を支えた社会事業の大きな流れを俯瞰した。かつて聖徳太子が上町台地に四天王寺を開き、窮民を救ったとされる悲田院が、日本の社会福祉の始まりといわれる。時代は下り、町人の都

市として栄えた近世の大坂では、社会基盤の多くが町人たちによって整備され、町人自ら詳細な町定をつくり町の運営に当たり、捨て子の対応まで責任をもって行われていた。こうした風土が、近代の急激な都市化がもたらした、貧困や労働問題、衛生や健康問題、教育問題など、噴出した都市問題を受け止める土壌ともなった。いわば、近代における社会福祉事業の苗床・実験場として、数々の先駆的取り組みを生んでいった。

『上町台地 今昔タイムズ』Vol.15の1面では、地域を越えた視野で1918年のスペイン風邪の猛威や、同年に全国に広がった「米騒動」*2の衝撃から、大阪では困窮者の生活事情に柔軟に対応するため、調査に基づく新しい福祉の形を模索して、官民が連携した社会事業の大転換が行われていったことに注目。例として、同年(1918年、大阪府が創設した方面委員(のちの民生委員)制度や、翌年(1919年)全国初となった大阪市立児童相談所と

託児所の開設。この年、実業家・大原孫三郎が、社会問題の本質的な解決を目指す科学的な研究機関として、大原社会問題研究所を上町台地に開設した。さらに、1921年、大阪市による日本初の公設セトルメント(隣保館)として、地域の社会教育や診療、乳幼児・児童の保護、就労支援や生活相談など、社会事業の一大拠点となった北市民館が、台地の北方、天神橋筋六丁目に開設されたことなどを挙げた。同紙の2面では、これらのDNAを受け継ぐ拠点の集積や次世代を育む実践を紹介している。

を切り拓いていく動的なプロセスでなければならぬ。近代に花開いた文芸や言論は、やがて戦時体制に入って規制や弾圧の対象となり、場合によっては利用され、相互扶助の仕組みが戦時体制の相互監視や総動員の基盤にされてしまった負の側面があることも、忘れてはいけない。長い時間軸で『知』を捉え、終わらなき対話が続ける、歴史実践の重要性がそこにある。

筆者が取り組んできた、ささやかな歴史実践の一つである『上町台地 今昔タイムズ』を題材として、今回は災害と福祉を切り口に、注目すべき観点を紹介した。過去と現在の間の対話は、決して歴史に絶対的な意味づけをするためのものではない。むしろ不断に見つめ直し問い直し、未来

『おわりに―『共』の知を継承していくために―』

筆者が取り組んできた、ささやかな歴史実践の一つである『上町台地 今昔タイムズ』を題材として、今回は災害と福祉を切り口に、注目すべき観点を紹介した。過去と現在の間の対話は、決して歴史に絶対的な意味づけをするためのものではない。むしろ不断に見つめ直し問い直し、未来

注

*1 『上町台地 今昔タイムズ』のバックナンバーは、大阪ガスネットワーク(株)エネルギー・文化研究所のホームページで公開している。https://www.og-elpj/project/ucor/evn2_konhmtl

*2 1918年、第一次世界大戦による米の価格急騰が引き起こした社会不安が瞬時に全国に広がり、都市部では暴動に発展した。

ひろもと ゆかり
大阪ガスネットワーク(株)エネルギー・文化研究所研究員、住宅建築専門誌『新住宅』編集員等を経て、1992年から大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所(CEL)研究員、『上町台地 今昔タイムズ』の発行をはじめ、生活・文化の視点から、都市居住やコミュニティの持続的発展につながる情報発信等に取り組む。共著に『大阪新・長屋暮らしのすすめ』『地域を活かすつながりのデザイン―大阪・上町台地の現場から』(ともし創元社)など。